地球研プロジェクト
「日本列島における人間－自然相互関係の歴史的・文化的検討」（列島プロ）

奄美・沖縄班　（南島の海・山・里の歴史を踏まえた未来への提言）

リーダー:　安渓　遊地　（山口県立大学、人類学）

キーワード:（5 つ程度）
Native anthropology、奄美沖縄の人と自然、聞き書き、島の生活誌、研究資料集成

1. 研究目的と内容

1－1 研究目的とプロジェクト終了までに期待できる特に大きな成果

奄美・沖縄の特徴である、湿潤亜熱帯の島嶼という条件のもとに成立したユニークな生物多様性と、たとえば鹿児島以北のすべての日本語諸方言よりも大きな相違をその内部にもつ琉球諸方言にみられる生活文化の多様性。これら、自然と文化の多様性とその成立の過程を明らかにすることが当初からの研究の目的である。

具体的には、奄美大島と沖縄島およびその周辺の島々を研究対象として、琉球弧において少なくとも１０年、できれば２０年以上の経験をもつ人を中心に研究チームを編成し、地元主導で自然や文化の研究をしてきた多彩なグループの人脈と成果を生かしうるメンバー構成とした。１年目に合宿形式による共同調査を、奄美大島と沖縄島北部で実施した。これは、文理融合的な研究の実際を経験し、かつ「調査されるという迷惑」を止揚して輝きをもちうる地域研究の可能性について、全員が意識と行動規範を共有するという目標は、ほぼ達成されつつある。この経験は、その後の個別のグループテーマによる研究・小規模な合宿調査にも充分受け継がれている。情報交換とブックレット等の編集作業のためにメーリングリストを活用した結果、共有されたメッセージの総数は、2010 年 11 月現在で 2125 通に達している。

2009 年 2 月の地球研やんばるフォーラムへの協力と、9 月の奄美大島大和村セミナーの実施を通して、また、聞き書きブックレット 4 冊の発刊の経験から、共同調査の結果をわかりやすい形で地域に情報発信し、還元していくチームワークがとれるようになってきている。

こうした経験を経て、概念的な部分については、文一総合出版の 6 巻本の中におおむね盛り込み、一般の地域住民向けのブックレットをプロジェクト終了までに合計 6 冊刊行する計画を進めており、さらに、将来奄美沖縄の人と自然の研究をめざす人々にとっての、基礎的な手がかりとなる研究資料集成『南島の人と自然（仮題)』を編纂し、2011 年 3 月 19 日（土）に、沖縄大学土曜教養講座と共催で、那覇市においてブックレットおよび研究資料集成の刊行記念のシンポジウムを実施して、奄美沖縄地域の人と自然の関係について、過去・現在・未来にわたる討議を実施することを予定している。

これらの成果を一言で言えば、島に暮らす住民の視点にたつ調査研究・地域での刊行物の出版・地域へのていねいな情報発信である。研究資料集成は、プロジェクト終了後も地域および全国の図書館等において長く活用されるであろう。また 5 年間の共同研究を通してつちかわれ

たチームワークを生かした「聞き書き・島の生活誌」ブックレットの続編の刊行も、地元出版社との協働で進めていくことができると考えている。

1－2 研究体制　　氏名（所属）：専門分野，バックグラウンド，担当項目など（補助的に参加する方（例えば大学院生等）には，☆印をつけてください）

○安渓　貴子（山口大学非常勤講師）：生態学、バックグラウンドは微生物学、ソテツ等の利用からみた奄美・沖縄の文化史。

◎安渓　遊地（山口県立大学国際文化学部）：地域研究、バックグラウンドは人類学、近世の物々交換経済のネットワークの復元。全体の統括。

☆蛯原　一平（東北芸術工科大学 PD 研究員）：地域研究、バックグラウンドは生態人類学、島嶼環境におけるイノシシと人間の相互関係。（昨年度までのメンバーであるが、所属変更につき位置づけを見直し、公的には研究協力者とさせていただく。）

○木下　尚子（熊本大学文学部）：考古学、バックグラウンドは考古学、6-8世紀のヤコウガイ大量出土遺跡の検討。

○瀬尾　明弘（総合地球環境学研究所）：植物生態学、バックグラウンドは植物生態学、植物相とその利用からみた奄美・沖縄史。

○当山　昌直（沖縄県文化振興会史料編集室）：地域研究、バックグラウンドは生物学、空中写真を用いた山林利用史の復元研究。

○渡久地　健　（琉球大学非常勤講師。南島地名研究センター）：サンゴ礁の科学、バックグラウンドは地理学、サンゴ礁の利用の奄美・沖縄の比較研究。

○早石　周平（鎌倉女子大学専任講師）：動物生態学、バックグラウンドは霊長類学、陸上動物相とその利用からみた奄美・沖縄史。

☆三輪　大介（兵庫県立大学大学院博士課程）沖縄を中心とする環境政策史

○盛口 満（沖縄大学）：環境教育、バックグラウンドは生物学、奄美・沖縄の自然と人をめぐる環境教育の開拓。

1－3 研究の内容と方法（重点対象とする地域，具体的方法など）

奄美沖縄で、自然資源の豊かなところとその資源が破壊されたところに注目して、フィールドを選定し、奄美では上野村と瀬戸内町、沖縄ではやんばるを協同での現地踏査の中心としたが、それぞれのメンバーの専門や関心に応じて、広範な地域において研究を展開してきた。自然資源利用の歴史についての聞き取りについては、宮古島とその周辺が手薄ではあるが、八重山から屋久島・種子島にいたるまで全域で実施してきた。研究の方法は文献・考古資料・聞き書き・参与観察などである。

2008 年度からは、韓国の研究者との共同研究を推進しているので特に付け加えておく。2009 年 2 月の地球研・琉球大学共催のやんばるフォーラムに、韓国ソウル大学校の全京秀（チョン・ギョンス）教授が参加してくださり、ディスカッションをおこなった。そのあと、全教授は安渓遊地・安渓貴子とともに与那国島および西表島を訪問して、1477 年の済

州島漂流民についての共同調査を実施した。2009 年 9 月には、全教授の指導を受けた陳泌秀（ちん・ぴるす）氏を列島プロジェクト奄美セミナーに招いて、沖縄島での米軍基地と住民の山林利用についての発表をお願いするとともに、安渓遊地・安渓貴子ともに、奄美大島の精神世界をめぐって１週間のフィールドワークを行った。2010 年度、陳泌秀氏が奄美沖縄における環境教育をめぐる発表を韓国においておこなった際には、西表島でのフィールドワークや、さまざまな文献・研究の視点など、奄美沖縄班のネットワークをフルに生かして全面的に協力した。発表の結果は、全教授からも研究者としての取り組みが深化していると高く評価していただいた。

国際研究の推進。安渓遊地と安渓貴子は、全教授のコーディネートにより、湯本プロジェクトリーダー、地球研の秋道副所長とともに、2009 年 10 月に雲南大学で行われた「東アジア人類学家会議」に参加して、安渓遊地が、奄美沖縄の物々交換について発表。2009 年 11 月には、安渓遊地・安渓貴子は、済州島を再訪。韓国琉球沖縄学会の発足に参加して、安渓貴子が、奄美と沖縄のソテツ利用について発表した。今後、2 年に一度のペースで中国、韓国、日本にロシアやモンゴル、ベトナム等をも含めた東アジアでの研究交流と学術研究の発信を推進することになり、その一翼を地球研がになうことで合意をみた。さらに、国際ジャーナルの刊行についても合意され、安渓遊地が日本側の編集委員として加わることになった。

2. 最終的な成果（年度末までの見込みを含む）

【地域班】

2－1 「賢明な利用」とは何なのか. その破綻を分かつ条件はなにか（研究例を整理したうえで, どのような条件下で生物資源の持続的な利用と資源管理が実現し, どのような要因がそれを破綻させるのかを考察してください）

とりあげた事例は以下のように多岐にわたった。

・八重山のジュゴンの絶滅。捕獲頭数の増加と個体数減少に対し、王府に代わるガバナンスの構築が間に合わなかった（下記の 2-3 の②）

・国有林と県有林のはざまで盗伐にあけくれたやんばる山中の村ユッパ。

・沖縄島北部のクスノキの植林と戦後の皆伐。

・平等配分が徹底していた名護湾のゴンドウクジラと希少品としての牙。

・正月にひとり５０株植えることを義務づけていたソテツの島・与路島。

・戦争マラリアで人口の約 3 分の１が殺された波照間島。

・セマルハコガメを大量に捕獲して売り、イリオモテヤマネコ用の罠をしかけて捕まった男。

・沖縄でのウニの漁獲の激減とその例外とみなしうる事例。

・ヤマネコと共存する合鴨稲作を選択してヤマネコ被害に悩む西表島農民。

・沖縄島のやんばる山中に建設されている低コスト海水揚水発電所。

・「非賢明な利用」とは、採補効率や生産効率の低下が、利用できる生物資源量の減少などの兆候によって、採補者・生産者達にある程度正確に認識されていたにもかかわらず、それを回避する方法がとられず、最終的に資源の再生が不可能となって利用を放棄せざるを

得なくなった場合、などが典型的なものである。
・ある利用法が「賢明な利用」であるかどうかは、さまざまなステークホルダーがいるために同時代人には判断が難しく、後に絶滅や環境汚染を引き起こしたことを通して、「非賢明な利用」であったことに気づくのが通例である。したがって、失敗の歴史を充分に学んで、それを将来に生かす努力をすることが「非賢明すぎない利用」のためのほとんど唯一の道であり、この列島プロジェクトの価値もそこに存するのである。

2－3 で再論するが、自然資源の利用を「協治」している何層もの環境ガバナンスの層のいくつかが判断停止におちいって機能を果たさなくなった時にも、他の層がある程度その欠落を補えるような社会的な関係が成り立っている時には、「それなりに賢明な利用」が続けられるものと考えられる。

2－2 持続可能な資源利用における伝統的知恵（Traditional Ecological Knowledge, 伝統的生態知識、民俗知などを含む）と科学的知識（Scientific Ecological Knowledge）の役割を具体的な例を挙げて比較してください.

そもそも、自然利用において運用される知識をこのように二律背反的に分けて対比させることは無理があり、たとえば、魚類やその生息環境についてのきわめて緻密で実証的な知識の体系なしには、漁業という生業そのものが成り立ち得ないことはあきらかである。山当てなどの地域ごとの伝統的生態知識が、科学技術の粋を集めた GPS つきの自動運転や魚群探知機にとってかわられる時、横波による転覆や乱獲などが起こっている。こと、生業経済の分野においては、科学的知識に基づく近代的な技術なるものが、いかに脆弱な基盤しかもたないかを思い知らされる例が多い。

琉球王府時代の資源管理技術（地面格護，水道の法，抱護の思想など）は、地域社会の構造的特性（土壌や気候）に立脚した「地域技術」であった。また、杣山分割政策等を契機として確立した部落単位での資源管理制度（CBRM）は、現在の入会林野の基盤を形成してきた。しかし、琉球処分以降、近代的農業・林業・土木技術といった汎用性の高い技術に置き換えられ、また官没や私有化によって多くの入会林野が解体・消滅の道を辿り、開発対象とされてきた。

現代の赤土流出などに象徴される技術のミスマッチは、科学的知識・技術が資源の持続可能性を必ずしも担保しないことを如実に示している。その観点からみると知識や技術の「伝統性」と「科学性」にはそれほど意味はなく、むしろその土地の自然資源に適合する知識や技術を採用していたか、という点が問題となるのではないだろうか。王府時代の技術は「伝統的」でもあるが、同時に「科学的」でもあったのである。

2－3 持続可能な資源利用における「重層する環境ガバナンス」の役割について，事例を元に考察してください.

詳しくは、安渓遊地「失敗の歴史を環境ガバナンスで読み解く」（文一出版の６巻本の第１巻

８章に執筆）を参照していただきたいが、資源の利用に関係する重層したガバナンスが、以下のような関係にある時、持続可能な利用に結びつきうると考えられる。

① 環境の「協治」が実現するためには、同じレベル（同じバイオリージョン）の利害関係者の間で、情報の共有が行われること。
② 正確な情報に基づき、環境の変化のスピードをおりこんで柔軟に対応できる環境ガバナンスで順応的管理ができること。
　例）ジュゴン
③ 同じレベル、あるいは隣り合う層の環境ガバナンスの対立が起こったとき、広域の環境ガバナンスがこの対立を調整できること。
④ 重層し連関する環境ガバナンスのどれかの層で「協治」の機能が停止し、そのガバナンスが機能不全に陥ったとしても、その役割をある程度補完できるような体制が取られている場合。

また、広範な地理的範囲を覆う環境ガバナンスほど、その影響が甚大になるということも忘れてはいけない。

具体的な事例としては、水俣病などを取り上げて考察した。

2－4 未来に向けて生物多様性を維持し、資源を持続的に利用するための「過去からの教訓」を挙げてください.

安渓遊地「失敗の歴史を環境ガバナンスで読み解く」（文一出版の６巻本の第１巻８章に執筆）で紹介した事例に学ぶことができると考えられる。成功事例よりも失敗事例とそこからの立ち直りの過程にこそ学ぶ点が多い。

2－5 プロジェクトで行われたさまざまな研究成果

文一総合出版から刊行予定の、６巻本の第４巻を北海道班とともに執筆。一般向けには、読みやすい『島の生活誌ブックレット』を６冊刊行。年度末に向けて、人と自然の関係の基本資料集の刊行を準備している。これには、６巻本には収録されなかった、三輪大介氏の論考をはじめとする個別の論考と、プロジェクトで収集した資料や空中写真の画像などを収録する予定である。

扱う時代が古代であるため、ブックレットの企画には加わっていない木下尚子氏は、おおむね以下のような成果をあげているので、とくに記しておく。

ヤコウガイ計測調査の進展状況など

平成 21 年度で奄美大島でのヤコウガイ計測調査をひととおり終え、沖永良部島について新たな調査を始めた。また昨年後半から沖縄諸島について調査を開始した。沖縄では貝塚時代早期からややまとまった資料がある。久米島では貝塚時代後期初頭から中頃の豊富な資料があるので、近い将来沖縄地域のヤコウガイデータは充実するだろう。資料な限界はあるものの、以

上をふまえて奄美諸島の６～８世紀にみられる大量消費の意味について検討を進めたい。

2010 年３月　ヤコウガイ計測を効率的に進めるために、熊本大学工学部の協力を得てヤコウガイ計測器を開発した。

ヤコウガイ計測調査（2009 年の未報告のものも含む）

2009 年 9 月 10 日：奄美大島長浜金久遺跡（鹿児島県埋蔵文化財センター）

2009 年 10 月 3 日：久米島大原第二貝塚 B 地点（沖縄県埋蔵文化財センター）

2009 年 10 月 16 日：沖永良部島西原海岸遺跡（和泊町教育委員会）

2009 年 11 月 5 日：沖縄本島野国貝塚 B 地点（沖縄県埋蔵文化財センター）

沖縄県新城遺跡（沖縄県埋蔵文化財センター）

2010 年 3 月 12 日：久米島清水貝塚（久米島自然文化センター）

2010 年 8 月 11～12 日：久米島清水貝塚（久米島自然文化センター）

２－６　そのほかの研究成果（5 年分の個別の研究成果とその概要を列記してください）

多岐にわたり、分量も膨大なものとなるため、これまでの毎年の報告を参照されたい。

２－７　今年度の研究成果の発信（刊行物，学会・シンポジウム発表，地域での成果報告会，新聞掲載，TV・ラジオ出演など）．分野を超えての取り組みなど，注目すべきものには概説を加えてください．

書籍

安渓遊地ほか編（2010）『奇跡の海―瀬戸内海上関の生物多様性』南方新社

日本生態学会、日本ベントス学会、日本鳥学会、日本地理学会の自然保護関連委員会の協力でつくりあげた、学会の要望書を軸にした上関原子力発電所予定地の「もうひとつの環境影響評価書」

安渓貴子（印刷中）『「地獄」と「恩人」の狭間で――沖縄と奄美のソテツ利用』文一総合出版

蛯原一平・安渓遊地・安渓貴子(2010)「西表島祖納・ヤマネコは神の使い」『聞き書き島の生活史③田んぼの恵み八重山の暮らし』安渓遊地・盛口満編 pp. 7-20、ボーダーインク

安渓貴子・安渓遊地(2010)「西表島祖納・神司として島を守る」『聞き書き島の生活史③田んぼの恵み八重山の暮らし』安渓遊地・盛口満編 pp. 21-42、ボーダーインク

安渓貴子・安渓遊地(2010)「竹富島・日本最南端のお寺で」『聞き書き島の生活史③田んぼの恵み八重山の暮らし』安渓遊地・盛口満編 pp. 73-86、ボーダーインク

当山昌直・安渓遊地・安渓貴子・渡久地健・早石周平(2010)「国頭村奥間・与那覇岳に試験場があった頃」『聞き書き島の生活史沖縄島の暮らし２』早石周平・渡久地健編 pp. 73-94、ボーダーインク

蛯原一平（2010）亜熱帯の森に眠る猪垣―沖縄県西表島の猪垣の配置形態と構造.「日本のシシ

垣―イノシシ・シカの被害から田畑を守ってきた文化遺産（高橋春成編）.」，古今書院，東京.（印刷中）

三輪大介（2010）安田のシヌグと回帰する時間.「ウチナー・パワー（天空企画編）」，コモンズ，2010 年

盛口満（2010）「ゲッチョ先生のナメクジ探検記」，木魂社，245pp. 2010 年 4 月

盛口満（2010）「ひろった・あつめた　ぼくのドングリ図鑑」，岩崎書店，35pp. 2010 年 10 月

盛口満（2010）「フライドチキンの恐竜学（張東君翻訳）」，世茂出版，台湾，220pp.

渡久地健（2010）コラム⑤ 琉球列島のサンゴ礁.「沖縄県史 各論編　第三巻　古琉球（沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編）」、沖縄県教育委員会、pp. 86-87.　（2010 年 2 月発行）。

渡久地健（2010）サンゴ礁の民俗分類・地名・漁撈活動.「大和村誌（大和村編纂委員会編）」、大和村、pp. 801-822.　（2010 年 3 月発行）。

渡久地健（2010）天久の自然環境の概観.「天久誌（天久誌編集委員会編）」、天久資産保存会、pp. 1-14.（2010 年 6 月発行）

当山昌直（2010）特論　沖縄―沖縄島やんばる―.「野生動物保護の事典（野生生物保護学会編）」，pp. 756-767. 朝倉書店.

＊概説：沖縄島やんばるについて、気候・地勢、野生動物、保護区、開発の現状、保護の歴史、保護の展望等について、その概略を述べている。特に過去の利用形態について、古い空中写真を利用しながら地域によって利用の仕方が異なることを示した。

学術論文

安渓貴子・安渓遊地（2010）「島からのことづて①530 年前の記憶を生きる」季刊『東北学』25 号 pp. 100−115

注：与那国島の 530 年を経た伝承と、李朝実録の記載の対比。

蛯原一平（2010）琉球列島におけるイノシシ猟の歴史的展開と生態的基盤. 学位申請論文（京都大学）. 2010 年 3 月.

木下尚子(2010)先史奄美のヤコウガイ消費―ヤコウガイ大量出土遺跡の理解にむけて―.文学部論叢　101: 35～55、熊本大学文学部

Maeda Y, Miyamoto J, Ozaki K, Moriguchi M, Kakishita A (2009) Natural distributeon of *Lilium alexandrae* (*Liliaceae*) in Amami Islands of Ryukyu Archipelago, Japan. J*ournal of Phytogeography and Taxonomy* 57: 77-79.

三輪大介・三俣学（2010）コモンズを守り活かす戦略に関する一考察：近年の法学的コモンズ研究の興隆に寄せて. 商大論集 61(2-3): 1-32.

三輪大介（2010）入会の全員一致原則と環境保全機能：鹿児島県大島郡瀬戸内町における入会係争事案の調査から. 地域研究 7: 19-31.（査読あり）

三輪大介（2010）入会林野における利用形態の変容と環境保全：入会地の“保存型”利用に関する考察.　環境社会学研究　16（印刷中）.（査読あり）

三輪大介・室田武（2010）沖縄県「海浜条例」と入浜権運動：入浜権運動の現代的意義と課題.

居住福祉研究 10(印刷中). （査読あり）

Toguchi K (2010) A brief history of the relationship between humans and coral reefs in Okinawa. T*he Journal of Island Sciences* 3: 59-70. （査読あり）（2010 年 2 月発行）。

渡久地健（2010）グアム、パラオの漁業――サンゴ礁とのかかわりを中心に. 島嶼科学 2: 45-57. （査読あり）（2010 年 2 月）

渡久地健（2010）へた／ピザ考――地名をして語らしめよ.「南島の地名 第 7 集（南島地名研究センター編）」、ボーダーインク。（印刷中）

当山昌直（2010）両生爬虫類野外調査記録―1973 年奄美大島・喜界島. *Akamata* (21): 48-53. （査読あり）. 2010 年 6 月

紀要・報告書など

安渓遊地（2010）「父たち」の待つ村への旅――私のアフリカ経験から. 東北学 24：36-49

盛口満 （2010）視聴覚機器に頼らない自然科学教育の試み. 地域研究 7: 47-52.

盛口満 （2010）小学校教員養成における博物館の展示活動への参加の試み. 沖縄大学人文学部紀要 12: 123-127.

盛口満・珊瑚舎スコーレ・サポーターの沖縄大学学生たち（2010）“学ぶってなんだろう？”Ⅲ 珊瑚舎スコーレの授業実践記録から.「沖縄大学・学生支援 GP ブックレット」, 44pp.

その他の刊行物

学会発表

EBIHARA I. The ecological characteristics of snare hunting of Ryukyu wild boar in Iriomote Island, the South of Japan. *8th International Symposium on Wild Boar and Other Suids.* (1-4 September 2010, York, UK, Oral presentation.)

Hayaishi S. Current status and conservation of Japanese macaques in Yakushima Island. *International Primatological Society XXIII congress*. (Aug, 2010. Kyoto, Kyoto University, Poster presentation.)

＊概要：屋久島にのみ生息する中型哺乳類の個体群存続可能性分析からみた保全の方策について検討しました.

三輪大介. 沖縄県『海浜を自由に使用するための条例』と入浜権の比較研究. 第 10 回日本居住福祉学会全国大会.（2010 年 5 月，法政大学. 口頭発表）

渡久地健（2010）奄美・沖縄のサンゴ礁の民俗分類と地名. 第 213 回沖縄・八重山文化研究会例会.（2010 年 6 月 20 日、沖縄県、沖縄県立芸術大学附属研究所、口頭発表）

当山昌直. 近世琉球史料にみる海馬について（予報）. 2010 年度沖縄生物学会大会.（2010 年 5 月，沖縄県，名桜大学. 口頭発表）

シンポジウム・企画講演会・地域での報告会など

安渓貴子「アフリカのキャッサバ食の多様性と独自性」公開シンポジウム「今、キャッサバを考える」（2010 年 6 月 19 日、京都大学稲森財団記念館。口頭発表）

注：南西諸島で伝統的に食してきたソテツと同じように、有毒で食用にするには毒抜き

が必要なキャッサバ芋について、主にアフリカ大陸において論じた。環境の違い、植民地の歴史の違い、文化史の違いを背景に、そこに生きてきた人々の、毒抜きの原理から整理した技術。知恵を体系づけて紹介した。

安渓遊地・安渓貴子「済州島から与那国へ――530 年前の漂流と辺境の民の記憶力」北海道大学スラブ研究センター「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界土曜市民セミナー（2010 年 10 月 16 日、北海道大学総合科学博物館、口頭発表と、1 ヶ月間の展示）

安渓遊地・安渓貴子（2010 年 12 月）：同上を、沖縄県那覇市で北大 GCOE の「国境展」の中で展示予定。

三輪大介．シンポジウム「上関原発建設問題と若者たち」，エントロピー学会第 28 回全国大会．（2010 年 10 月，同志社大学，企画・運営）

三輪大介．コモンズとしての海．祝島茶会．（2010 年 5 月，京都市，講師）

早石周平（琉球大・教育セ）．奄美・沖縄地域の人と自然の関わり史．第 54 回プリマーテス研究会．（2009 年 11 月，愛知県犬山市，日本モンキーセンター，口頭発表）

盛口満（2010）沖縄の自然と、自然のみかた．第 20 回全国ネイチャーゲーム協会大会，2010 年 5 月 28 日．

盛口満（2010）さまざまな生物と日本人　シマの動物たちの今・昔．国立科学博物館・大学生のための自然史講座「国際生物多様性年に考える日本の自然」第 8 回，2010 年 9 月 3 日．

盛口満（2010）どんぐりの魅力．北海道開拓記念館・特別展記念講演，2010 年 9 月 19 日．

盛口満（2010）オープンミュージアム！やんばるの森のまか不思議　やんばるから考える日本の森林と生物多様性．沖縄大学土曜教養講座・生物多様性シリーズ・パート３　日本森林生態系保護ネットワーク森林シンポジウム，2010 年 10 月 2 日，那覇．

盛口満（2010）見えない繋がり　“キノコ”から探るやんばるの森．沖縄大学土曜教養講座・生物多様性シリーズ･パート３　日本森林生態系保護ネットワーク森林シンポジウム, 2010 年 10 月 2 日，那覇．

渡久地健（2010）奄美・沖縄のサンゴ礁の知識と漁撈活動．第 5 回沖縄国際学術会議．（2010 年 10 月 4 日、韓国、ソウル大学、口頭発表）

＊発表原稿は、同日発行の『ソウル大学人類学科編『海洋から見た東アジア――琉球・沖縄の視点』、pp. 13-31.に掲載』。

当山昌直．百年前、沖縄の自然界に何が起こったのか．平成 22 年度名桜大学総合研究所出張講演会「マングース 100 年目に移入種について考える」．（2010 年 4 月 10 日，沖縄県，沖縄こどもの国．口頭発表）．

新聞掲載など

安渓遊地（2010）自然と文明の地球人類学――梅棹忠夫氏の残したもの．西日本新聞 2010 年 7 月 13 日

安渓遊地（2010）宮本常一先生の装備・愛情・勇気. 図書新聞 2010 年 10 月

安渓遊地（2010）世界の若者と語るミヤモト・ツネイチの魅力. 出版ダイジェスト 2010 年

10 月

渡久地健（2010）サンゴ礁の地名図――漁民が刻んだ海の記録（上）．沖縄タイムス（沖縄、那覇）（2010 年 5 月 11 日、文化面掲載）。

渡久地健（2010）サンゴ礁の地名図――漁民が刻んだ海の記録（下）．沖縄タイムス（沖縄、那覇）（2010 年 5 月 12 日、文化面掲載）。

盛口満（2010）やんばるの森の多様性　一様ではない“いい森”．琉球新報（沖縄、那覇）（2010 年 9 月 30 日）

TV・ラジオ出演など

当山昌直．琉球放送「ウチナー紀聞」,「山歩き～自然と歴史に抱かれて～」（2010 年 9 月 26 日 11:00～11:30）.

3. 今後の活動

3－1　今後の取り組みの予定と研究活動の広がり

プロジェクト終了後も、チームワークを生かして随時合宿やその成果発表としての生活誌ブックレットの刊行をめざしたい。以下は、個別の研究計画である。

渡久地

未整理の聞き書きの完成。

１）5 年間の成果を踏まえ、サンゴ礁における漁撈活動の特徴を描き出す。

２）宮古諸島における「人とサンゴ礁」の研究は比較的少なく、今後、宮古諸島まで研究の視野を広げる予定。

３）研究対象地域における「人とサンゴ礁との関係」を考えていく上で少しでも役立つ方向性を模索していく。

盛口

かつての琉球列島の里の自然の復元と、シマと呼ばれる集落ごとの自然利用の多様性について、統計書の調査も踏まえながら明らかにしていく。それとともに環境学習における学校教育の可能性と限界を探る。

これまでの、聞き書きをまとめ、緑肥利用を中心に、繊維利用や家畜の飼料として利用されていた植物を比較することで、現在は変化してしまっている、かつての琉球列島の里の自然の復元を試みた。また、シマと呼ばれる集落ごとの自然利用の多様性についても明らかにしようと試みた。その経過の中で、特に沖縄島を中心とした琉球王朝下の島々と、奄美諸島を中心とした薩摩藩の領土となっていた島々では緑肥利用の違いだけでなく、田んぼが減少していく過程も異なっていることに気付き、統計書の調査も行った。

一方、現代の沖縄の学校現場において、児童・生徒・学生がどのような自然認識をもっているかをアンケート調査し、その結果や、私が関わっている珊瑚舎スコーレの生徒による自主授業、郊外活動、及び夜間中学の授業のやりとりなどをふまえ、学校教育の可能性をさぐった。

当山

近代の沖縄島やんばるにおける生物資源利用に関する史料調査と聞き取り

早石

（1）奄美群島での聞き取りの継続．とくに，標高の低い島での調査.

(2)屋久島のサルの保全の方策を考えるために,地元の人々がどのように動物に接してきたか,聞き書きのような調査を交えて進める.

（3）隣接する種子島のサルが 20 世紀中頃に絶滅したと推測されるが，明治期以降，どこでどのような過剰な資源利用が行なわれてきたか，奄美･沖縄班で学んだ手法によって，推察する.

（4）神奈川県鎌倉の都市近郊の緑地の経歴について，奄美･沖縄班の手法で情報整理.

蛯原

（1）狩猟および農作物被害対策にかかわるガバナンスの変遷や、（特に人びとの移動が活発化する近代以降の）猟法の伝達普及過程に関する情報の蓄積をはかり、奄美沖縄各地でのイノシシの狩猟や利用に関する社会文化的背景の地域性を理解すること

（2）イノシシの分布拡大などに伴い野生動物との共存が喫緊の課題となっている東日本においても現地調査を進め、地域の環境・生業史からみた「獣害」発生の人文社会的要因を分析し、日本列島の農山村社会における狩猟と、野生動物をはじめとした自然資源利用の今後の再編過程について考究していく。

三輪

（1）沖縄島でのコモンズの長期存立要件の検証

（2）沖縄島の海域、とくにイノー（サンゴ礁原）におけるコモンズの調査

木下

これからも琉球列島全体のヤコウガイ消費動向を資料化する作業を続ける予定。ただ共同研究期間内に八重山までの調査は無理なので、これは事後の作業になる。

安渓貴子

森林におおわれた「高い島」を中心としたこれまでのフィールドワークの成果のとりまとめと、奄美沖縄の「低い島」を含めた、女性の生活誌に研究を広げたい。

安渓遊地

西表島の地名をはじめとする、これまでに集めた民俗誌資料のとりまとめ。

3－2 研究遂行上の問題点と解決策

盛口

これまでの調査で見えてきたことを学校現場で具体的に生かす、教育実践を作り上げていくこと。

当山

話者が高齢化しているなか、聞き取り調査を急ぐ必要がある。プロジェクトで築き上げたネットワークを利用してすすめていきたい。

早石

統計書のない地域で、ほかに参照できる資料の探索が必須。統計書がなくても、新聞や聞き取りによって資料収集を行なう。

3－2 プロジェクト終了後の2年間で到達しうる成果

渡久地

（1）サンゴ礁地形の民俗分類の奄美から八重山までを比較検討

（2）先行研究の地名語彙を整理し、渡久地による採集を合わせた「サンゴ礁語彙集」作成

当山

生物資源利用からみた、やんばるの地理情報（段々畑、猪垣、開墾地など）

早石

（1）奄美大島の大正地図にみられる山道による集落間ネットワークの地理的分析

（2）統計書からみた消費資源量推移と地域人口変動の群島間比較分析

三輪

（1）沖縄島国頭村奥地区資料にもとづく入会利用形態に関する新たな知見

（2）入山規制の実態から森林資源の順応的管理の可能性に関する検討

（3）共同店という社会装置によってもたらされる市場とコモンズの特異な相互作用に関する検討

（4）近現代の沖縄島国頭村における琉球王府時代の制度の継受（歴史的なガバナンスの変遷に伴う制度供給）に関する検討

蛯原

琉球列島における狩猟に関する民族誌

安渓貴子

西表島西部の食生活とその変遷

安渓遊地

年に一回程度は、有志があつまって、小規模な合宿研究をおこない、その活動をふまえて島の生活誌ブックレットを年に１冊程度を出版できる体制をつくることを考えている。

4. 未来への可能性

4－1 人と自然の相互作用環（個別成果の中で，人と自然の営みが相互に作用して変化し続けてきた例を挙げてください）

沖縄島やんばるの現在のすがたは、人と自然の相互作用環の結果としてみることも重要と考えている。具体的には、クスノキ、マツに代表される有用樹種の大規模植樹と短期集中的利用による集落近郊の景観の遷移。

傾斜地の畑地と草地の維持と、その放棄による森林化、とくに増加したマツ。

西表島の星立天然保護区の一見みごとなマングローブは、聞き取りによると大正時代の（カッチと称した）タンニン抽出工場の進出によって、皆伐されたあとに再生したものであるという。

4－2　生物資源利用の伝統的知恵や科学的知識をどのように統合して理解し，それを将来の人と自然のよりよいかかわり方に生かしてゆくことができるでしょうか.

渡久地

サンゴ礁地形の民俗分類や地名、魚の方名は、民俗知識ですが、それは漁撈活動という生業のなかに位置づけることによってはじめて「生きた」知識として描写できる。加計呂麻島西阿室の老漁民の外海における漁場位置確定技術「ヤマアテ」においても、サンゴ礁海岸の地名の知識が生かされていることも明らかになった

聞き書きから、サンゴ礁における漁撈活動は、「地形―潮―生物―漁撈」という関係として成立していることを明らかにしました。また、安渓遊地（1984）に示唆されつつ、サンゴ礁における漁撈活動を、「だれが（主体）／いつ（漁期・時間帯）／どこで（漁場）／なにを（漁獲対象）／どのように（技、漁法）」捕獲するかという視点で整理しなおした。サンゴ礁漁場は、（月齢、天候、潮の干満など）によって絶えず変動し、対象生物はその変化に伴って移動している。それゆえ、漁場の価値は変化していることになり、主体（漁民）は漁場価値が最も高い頃合を判断する必要がある。その判断に不可欠なのが、地形・潮・生物などに関する「知識」である。

当山

ただし、沖縄島やんばるについては、上記の視点からの体系化（研究）が進んでいないようにみえる。

早石

統計書からみて陸域の森林資源利用の多くが明治期以降の工業化によって，伝統的知恵から遠ざかっている。聞き語りの中で，農業については機械化，化学肥料化以前の伝統的知恵が多く残されているという印象をもった.

草地の植物資源は効率よい堆肥化，もしくはバイオマス燃料化の科学的方法があれば，草地という特殊な景観の回復，維持に役立ち，また地域の子どもが参加して刈り取るような伝統的な関わり方も再現できるかもしれません

蛯原

応用可能性を考える以前に、丹念なフィールドワークにもとづく、現在の人びとの自然に関する知識や資源利用活動についての実証的記述の蓄積を進める必要があるのでは。

安渓

西表島と屋久島での開発と自然保護をめぐる経験の検証に基づいて、私は、次のような仮定をもつに至った。Ａすなわち家族生活のレベルから、Ｇつまりグローバルなレベルまでの重層する環境ガバナンスのうち、「わが家」のＡレベルや、「ご近所」のＢレベルが加わっていない開発や保護の計画は、きちんとした経済的、あるいは学問的根拠のあるものでも必ず失敗する。これは、縄文杉の発見者の岩川貞次さんの「地の者の言うことを尊重しなければ、何事も成功するわけはありません（安渓・安渓、二〇〇〇）」という言葉を思い起こさせる。そして、関連するガバナンスのすべての層がうまく連携して動くようにできる時、はじめてそれなりの成果が期待できるのではないか。関係する範囲の環境ガバナンスの層のそれぞれが機能し、隣り合う層の間の連携がとれているならば、ステークホルダーの意見も取り入れられているはずで、そのような状態を、人間の側から見ての「それなりに賢い利用」と呼んではどうか、と私は考

えている。

4－3　統合化・一般化（個別成果をプロジェクト全体に統合するために概念化・普遍化するアイデアについて記入してください）

安溪

重層する環境ガバナンスの層が上下関係にあると考えるのは適切でない。それぞれカバーする地理的な広がりが異なり、それぞれに役割があるのである。そして、国境を越えて存在する河川や湖の場合に明らかなように、環境を協治していくために必要なガバナンスの地理的広がりは、人間が恣意的に引いた境界線とは一致しない場合が多い。このような自然の循環が定めている境界にそって生きることを、bioregionalism と呼ぶが、屋久島の詩人・山尾三省は、これを適切にも「流域の思想」と訳した（スナイダー・山尾、一九九八）。

環境ガバナンスに注目する理由はもうひとつある。地域の資源あるいは地球環境の「賢明な利用（wise use）」とは何かを考えるにあたって、価値判断を伴う賢明・非賢明を論じだしたら、立場が違うステークホルダー（利害関係者）が合意に達することは非常に難しい。それよりも、多様で重層的な環境ガバナンスのあり方とその相互の関係を分析しながら共存への道がないか考えてみてはどうだろうか。過去の事例についても、「なぜそうしたのか」と動機を過重に評価することや、「結果よければすべて良し」といった再現性のない評価をするのではなく、人間からの働きかけと自然の応答のプロセスとその相互作用をきちんとしたデータによって扱うことができる可能性がより高いのは、重層する環境ガバナンスに注目することであろう（文一６巻本第１巻８章から）。

当山

① 重層ガバナンスは重要な視点と考えている。
② 個人、団体（集落）、統治者というフィルターを透してみることが必要と考えている。
③ やんばるの生物資源利用については、人力、生活資源から機械、商業資源に変化したことが大きな節目になっていると考えている。

早石

ガバナンスレイヤーの地理的位置の表現。資源の始点から最終消費地までの移動経路にどのようにガバナンスの力が加わっているかを日本列島の地図上に表現する。たとえば移動経路から外れた位置にガバナンスの発生源があれば、（植民地的な）搾取の構造の表現としてわかりやすいと思う。

4－4　上記1～3を踏まえて，人と自然のよりよい未来を設計するにはどのようなあり方があるでしょうか.

当山

やんばるを例としてみると、③の現状から未来を設計するとして、②の視点を加えた①の考え方にヒントがあると思われる。

早石

伝統知が生きる場をつくるためには，かつて有効であった資源の行き先，ガバナンスの係り

具合を同時に回復する必要があり（再現しなくとも良い)、最初の「資源」へのかかわり方を、聞き取り調査を積み重ねることで地域の古老たちに教示してもらう。

安渓

「する・される」という立場の違いから生ずる、人間を対象とするフィールド科学にまつわる構造的不平等の問題。これは、研究者のモラルを高める努力だけでは解決できず、教育と研究者養成のシステムそのものへの見直しをせまる大きな問題である。ことに、「人と自然のよりよい未来」を誰が設計し誰が実行するのか、という点について無自覚なまま無責任な提言に足を踏み入れれば、その先にあるのは失敗の歴史へのあらたなページの書き加えにすぎないだろう。(だからといって、研究者が発言や行動を差し控えるべきだという意見を持っているのではない。一例であるが、最近日本で発刊された地球環境学についての大きな事典の索引に、原子力発電の項目も放射線の悪影響の項目もないのは、早い段階で改訂を要する重大な欠落のひとつではないかと思っている。)

私は、西表安心米運動にのめり込んだ結果、地域研究者としての矩（のり）をこえてしまったのだが、その思い上がりに対して、地域の人から「無理に無理を重ねて家族を泣かせるような学問が何になるの。よぉく考えてね、よそから持ってきた智恵や文化で地域が本当に生き延びられるわけがないのだということを」という言葉をもらったことがある。地域を活性化するには「ばか者」「よそ者」「若者」が必要だとはよく言われることだが、よそ者としての「活動家」が何らかの影響力を持ちうるとすれば、それは地域の人々に仲間として受け入れられる限りにおいてという限定つきであることを忘れてはならない。